

「つくり出す」喜びを感じられる図工の時間を指して

図画工作科
3年A組担任
西原 有香莉



はじめに

平成29年度告示学習指導要領で、育成を目指す資質・能力の3本柱のそれぞれに「創造」が位置づけられたことから、「創造性」を育むことが図画工作科で担う役割であることは明らかです。造形的な表現活動において、子どもは自分なりの表現を追い求め、試行錯誤します。それは、まさに「創造力」を発揮すると共に育んでいる姿です。その姿は、「つくり出す」ことの喜びが支えているのであり、活動過程の中で「表したいこと」つまり「自らの課題」をつくり出していく力が、より豊かな創造へと子どもたちを導いていくと考えます。そこで、自己のものづくりへの介入を実感できる素材として液体粘土に着目し、題材を考えてみました。

不織布ってどんなもの？さわってみよう！

本題材における価値の1つは、“質の変化”の体験です。子どもたちはやわらかな不織布が、液体粘土によって全く質が異なるということ、より強く身体感覚に印象付けられるよう、初めに不織布の素材体験を行いました。まずは、不織布に触れずに見た感じの印象を話し合い、次に、不織布を配布し、印象を確かめる時間をとりました。不織布を持った子どもたちは、破ったり、くるまったり、窓際に行くと風にあてたりする姿が見られ、不織布の見た目から感じた印象を確かめている様子が見られました。不織布に触った子どもたちの反応を右に紹介します。



【不織布に触ってみて・・・】
・やぶると、やぶったところがふわふわしている。
・丸めても、また戻る！（紙のようにぐしゃっとならない）
・どんどん折って重ねると、見えなく（透けなく）なるよ。
・くるまると、雲に包まれているみたい。 など

とろ～りねんどのまほうでいろんな“かたち”をつくってみよう

子どもたちには、「液体粘土」ではなく「とろ～りねんど」と素材を紹介しました。「ねんど」と言っても、子どもたちが今まで触れてきたねんどとは違い、どろどろの液体状のものです。どろどろの感触が「気持ち悪い」と言っていた子どもも多かったのですが、触れているうちに、ひんやりとろ～っとしている感触が気持ちよくなってきたようで、手全体を漬け込んでその感触を楽しんでいる様子が見られました。



十分素材と触れた後、「ふわふわの不織布が、このとろ～りねんどの魔法で、かちっとかたまるよ。」と話すと、「うそ～！」子どもたちは半信半疑でした。今回は、液体粘土を不織布にしみこませて、ペットボトルやプラスチック容器などにかぶせ、型取りをしました。金曜日に型取りをし、その3日後の月曜日、登校してきた子どもたち。金曜日にはどろどろだったものが、かちっと固まっているのを見てびっくりしていました。「カチカチ～！」「次はどんな形つくろうかな～」という反応が見られました。また、自分の型取りの仕方がうまくできておらず、「もうちょっと液体粘土を少なくした方がよかったかな。」「ぴっちりプラスチック容器にくっつけると、もっときれいな形になりそう。」といった、自分の活動への振り返りも、出来上がったかたちを通してしている場面も見られました。いずれにしても、“自分だけの”かたちが生み出せているという喜びを感じ、そのことを楽しんでいる様子でした。



おわりに

上記のような姿から、自分なりの表現をつくり出している事実と、その価値を子ども自身が実感していくことが、「つくり出す」喜びを支えることや、創造力を育むことに繋がっていると感じました。その後の展開としては、できたかたちを組み合わせるさらには何かを造形したり、もっと大きな型取りをしたり、多様に考えられます。

子どもたちは、あらゆる感覚を使って素材を味わいます。そして、体全身をつかって造形活動を行います。子どもたちの豊かな発想と造形活動を支えられる素材を探すと共に、その素材との出会わせ方、題材計画をこれからも考えていきたいと思えます。

